

サール『意識の神秘』ニューヨーク書評(1997)

第6章 チャルマーズと意識をもつ心 抄訳(数字は原文の頁を表す)

第1節 心の哲学には二元論と一元論とがある。二元論には、心と体とを別物とする「物質二元論」と、同一物質中の心的特性と物理的特性とを別物とする「性質二元論」とがある。一方、一元論には、観念論(唯心論)と、唯物論がある。135

一般人の多くは二元論の立場のようだが、学者のほとんどは唯物論である。唯物論は現代的科学観と整合的であるからだ。ネーゲルやマッギンのような性質二元論者はわずかである。故エクルス卿のような物質二元論者のみが魂の存在を信じているのだろう。136

だが唯物論には問題がある。物質現象の記述の中には精神現象の記述が含まれない。脳の記述の中には、信念や願望や痛みの記述がないのだ。唯物論は、精神現象を物質の記述に還元しようとするが、その試みこそがこの百年間の心の哲学の歴史なのだ。136

その歴史をたどるのはおもしろい。唯物論者は心を相手にしながらも、それから逃れたいのだ。真の心の存在に言及せずにはすませようと、心的状態を物理的状态へと還元する。それは容易なことではない。137

20世紀最初のこうした試みは、ライルやヘンペルの行動主義であった。心的状態は行動や、行動への傾向性にすぎないというのだ。言語行動は、口から音がでるだけなのだ。これは明らかに誤りだ。痛みの感覚は、それに伴う行動とは別物だと、みんな自覚している。行動主義は、「全身麻酔にかかっている」状態を相手にしているようなものだ。137

行動主義のもうひとつの問題は、心的状態が行動の原因になるという、我々の直感に反することだ。行動主義によると、雨が降りそうだという信念は、外出時に傘を持っていくという行動にほかならない。これは明らかにおかしい。137

そのうえ、循環が発生してしまっ、心は行動には正しく還元されないのだ。雨が降りそうだという信念は、雨に濡れたくないという願望があるときに限り、傘を持っていくという行動として現れる。雨に濡れたくないという願望は、雨が降りそうだという信念があるときに限り、傘を持っていくという行動として現れる。心を行動に還元するときには、他

のもろもろの心的状態に言及しなければならない。138

次の唯物論者の一手は、心的状態は脳状態と同一だとするスマートらの理論である。これは、「物理主義」とか「同一説」とかと呼ばれ、いくつかのヴァージョンがあるが、どれも困難を抱える。ひとつの困難は、どんな脳状態が心的状態を形成するかを説明しなければならないことであり、もうひとつは、脳以外の物質にも、心的状態が形成される可能性が生まれることである。138

行動主義と物理主義の良い点を組合せて「機能主義」という新理論が生まれた。この理論は、今日の哲学者の間で広く受け入れられている。パトナムやルイスなどの理論提案者によると、心的状態は物理的状態であるが、それが「心的」であることは、物理的構成によって定義されるのではなく、因果関係によって定義される。139

時計は物体であるが、いろんな素材から作ることができ、時計であることはそれが行う特別な機能、すなわち因果関係によって成立する。これと類似したことが心的状態に起きていとされる。すべての信念や願望は物理的なシステムなのだ。だから、どんなものでも、適切な因果関係にあれば心的状態をもつのである。139

雨が降りそうだという信念は、適切な因果関係にあるシステムなのである。雨が降りそうな空を見上げ、雨に濡れたくないという願望や他の機能的状態と合わさって、傘を持っていくという行動を引き起こす脳状態となる。またそれは、必ずしも脳でない物理的構成物が実現してもよいのだ。140

注意すべき点は、この実現に心的構成物は必要なく、物理的作用系列としてすべて実現されることである。心的状態は、それを構成する何らかの物体が形成した因果関係のパターンであり、その「機能的組織体」が物理的入力を得て、内的因果関係を経て、物理的出力を提示するのだ。141

「機能主義」はいろいろな分野で違った意味に使われているが、心の哲学では明確な意味をもつ。すなわち、心的状態は機能的状態であり、機能的状態は物理的状態であるのだが、その物理的状態は因果関係において機能的状態として定義される。141

信念や感情を深く内省するときには、誰も機能主義者ではないのだから、この理論は誤りであろう。しかし、この理論の意義を理解するために歴史の流れに注目したい。二元論は科学的でないので受け入れられなかった。行動主義と物理主義は失敗したので、いいところ取りをして機能主義ができた。唯物論者であれば、もはや機能主義しか代替案がないのだ。

だから、機能主義がもっとも広く心の哲学で受け入れられているのである。それがコンピュータと結びついて、認知科学の分野の支配的な理論ともなったのだ。141

認知科学者によると、脳の機能的状態は、コンピュータの計算論的状态に相当する。両者は因果関係のパターンの点で同一とされるうえに、プログラムという機能的組織体の完全なるモデルがあるとされる。今日、多くの機能主義者は、心的状態は「情報の処理」状態であるという。極端なコンピュータ機能主義では、脳はコンピュータであり、心はそこに実装されたプログラムであるとされるが、それを私は「強い人工知能」と呼んでいる。ゆえに今日心的状態は、唯物論的に、機能主義的に、情報処理との関連で計算論的に分析されているのである。142

しかし、こうした見地に立つ人々は意識の問題を抱える。痛みについての行動主義的分析と同様に、我々の痛みを機能的に分析すると脳コンピュータのプログラム状態になるとは、とても納得できないのである。正統的な科学的常識からすると(1)痛みは不快な感覚で、それは内的で、質的で主観的な体験であり、(2)痛みは脳の生化学的なプロセスと神経システムから生じる。142

機能主義者はこの両方を否定せねばならない。(1)痛みは脳の機能的組織体の部分パターンに他ならない。この機能的組織体とは、単に刺激が入力され、神経システムで情報が処理され、特定の物理的行動を引き起こすものである。(2)この機能的組織体の物理的状态から痛みが生じるのではなく、その状態が痛みそのものなのだ。143

意識の問題に直面すると機能主義が選択されがちだ。デネットはそうしたが、ネーゲルはその反対に機能主義を拒絶した。143

第2節 チャルマーズの『意識をもつ心』が注目される理由が見えてきた。彼は、唯物論、機能主義、強い人工知能といった考え方で心を説明しながらも、意識の問題については、機能主義的分析に基づかない取り組みをし、それらを両立させようとしている。彼の見解によると、物質世界には、還元不能な非機能主義的意識があるという。私に言わせれば、これは奇妙である。というのは、還元不能な意識や心的状態の存在を避けるため、そして二元論を避けるために、機能主義が発展してきたからである。ところがチャルマーズは、機能主義と二元論をともに受け入れるのだ。「機能的組織体から意識が生まれるとされるが、意識は機能的状態ではない。私の立場は非還元的機能主義であり、機能主義と性質二元論の折衷である。認知は機能的に説明できるが、意識はそうした説明を寄せ付けない」と、彼は言う。144

さらに奇妙なことに彼は、(1) 機能主義が意識を説明しえないことを示すため、機能主義に反対する陣営の議論を使う一方で、(2) その議論が目指すところの機能主義の否定は受け入れないのだ。その議論の中には、私やネッド・ブロックが示した、空き缶によるシステムや、中国人民によるシステムなど、どんなものでできたシステムでも意識をもつことになるといった議論も含まれている。144

チャルマーズによると、機能的組織体そのものは意識ではなく、機能的組織体に意識が附加されねばならない。その組織体は心的状態の要素を非意識的形態で提供するとし、彼はあとで、そこから意識が生じると示そうとする。機能的組織体は意識とは別物なのだが、いつも一緒なのだ。「組織体はシリコンチップでできていようと、空き缶でも、中国人民でできていようと構わない。ふさわしい機能的組織体である限り、意識経験は認められるのだ」と、彼は言う。145

どうしてコンピュータ機能主義と性質二元論がこんな奇妙な形で結びついたのだろうか。どうも『意識をもつ心』は、認知研究が絶望的になっている兆候のようだ。研究方法論のコンピュータ機能主義は捨てられない一方で、意識の機能主義的説明はいっこうに進まないからだ。単に機能主義を保ったまま意識に取り組むという姿勢だけで、彼の本はブレークスルーを予感させたのだ。それは、認知研究者が実は、還元不能な意識の存在を認めつつあることも示している。145

なんと彼の本の冒頭には、意識をまじめに扱い、意識の還元不能性を議論するとある。146

彼の議論は、ネーゲルやジャクソンやクリプキや私の議論から展開していくのである。しかしそれは、意識のないゾンビの論理的可能性にのみ立脚しているようである。そうしたゾンビが我々と区別がつかないほど人間的に行動するならば、我々の意識は行動や機能的組織体から構成されるはずがないと帰結できる。これはまさに、私が1992年に『心の再発見』で指摘したことに相当する。私の脳がシリコンチップに置き換えられたときに、その機械が「あなたに一目ぼれだ」とか「この詩は感動的だ」とかと発話しても、その「システム」には意識的な気持ちはまったくないだろう。こうしたシステムは論理的に可能だから、意識のないゾンビの存在には、なんの矛盾もない。147

だがチャルマーズの議論は、私には異議あるところまで展開してしまう。彼は、原子レベルまで人間と同一のゾンビを想像させる。私の見解では、脳の構造と機能が意識を生み出すのに因果的に十分であると我々は考えているので、意識のないこうしたゾンビを想像するのは不可能である。それでも彼は、ゾンビは生物学的には不可能でも、物理法則から論理的に可能であると主張する。そして、そのゾンビと人間とを比較し、後者だけに意識が

あるのだから、意識は物理世界の一部分ではないと結論する。147

これは正当な議論ではない。自然法則の異なる世界を想像すれば、豚が空を飛ぶ世界や、岩が生きている世界も想像可能である。だからといって、それらが現実の物理特性になるわけではない。意識のないゾンビは異なる自然法則を要求しているのだから、その世界に意識がないからといって、現実の物理世界に意識がないとは言えない。148

第3節 現実世界の意識の働きについて振り返ってみよう。痛みの刺激は、意識的感覚を引き起こし、「痛い」という発話行動に導く。この痛みの脳内プロセスは、神経生理学でさらに深く究明することができる。ところが、チャルマーズはこれを受け入れないのだ。意識と物理的現実とは分離されており、両者には因果的つながりはないとする。(後でわかるが、彼は万物が意識を「生じる」と主張する。脳の神経生理が重要なのではなく、あくまで機能的組織体が問題なのだ。) 149

彼の性質二元論では、痛みは心的現象であり、物理的現象ではないとされ、彼の機能主義では、痛みが物理的状態からなるとされるようである。だが、心の機能主義的分析と意識の還元不能性を両立させるためには、彼は機能的組織体に何かを付け加えないと意識の存在を説明できないのである。149

結局彼は、「痛み」には、物理的な意味と意識に依存した意味と2種類あると言う。そして彼の問題は、この2種類をどのようにつなぐかの問題となり、彼は「構造的ー貫性の原理」に望みをかけるのだ。この原理が、意識の構造と機能的組織体の構造とを互いに鏡像関係にするのである。彼は、この完璧な相関性を頼りに、意識的状态を機能的状態の説明したいのだ。両者には因果関係はなく、ただ「脳の機能的組織体のおかげで意識が生じる」と彼は言うだけである。150

これが彼の意識の説明である。どんなに我々の意識の直観とかけ離れていることか。現実生活においては、意識と機能的組織体は因果関係にある。そして問題なのは、機能的組織体は物理的因果関係に閉じていることである。だから我々は、この一貫性を説明するために意識が必要なのであり、意識を説明するために一貫性が必要なのではない。機能的組織体だけでは痛みの因果的説明には不十分なのである。150

チャルマーズの議論の新しさは唯一、意識と機能組織体の完璧なマッチングにあるようだ。その議論は「消え行くクオリア」と、「気まぐれクオリア」の形で現れる。これらの議論はともに、そのマッチング関係の維持から導かれる。つまり、マッチングに欠けることがあるものなら、システムの意識状態が次第に消え行くことや、気まぐれに変化することが

可能になってしまう。だが意識は機能組織体とマッチングしているのでそうしたクオリアはなく、機能組織体の安定性から、人間の行動は一定に、そして体系的に保たれているというのだ。151

けれども、この議論もまた問題を含む。ある種の機能組織体が、意識をもつかのようにふるまえる無意識システム（ゾンビ）となることが可能なのだから、その機能組織体と意識とはマッチングしないのである。つまり彼の議論にのっとれば、機能組織体と意識とは常に一緒であるとは限らないはずだ。151

さらに我々は、行動と意識の間には時に断絶が伴うことを知っている。たとえば、意識はしっかりしているものの、それを行動に出せない麻痺の患者もいる。152

完璧なマッチングがあるとしても、意識の説明にはならない。素材とは無関係なその組織体が、いかにして感覚を生み出すのか。いずれにしても彼の議論全体は、我々の脳科学の知見にことごとく反している。我々は、脳のプロセスが意識の原因となっていると、ちゃんと気づいているのだ。152

第4節 チャルマーズの本は、機能主義と性質二元論とを結合するというばかげた試みでいっぱいだ。ここで、その信じ難さが大きくなる順に4つ引用してみよう。（引用1）一般的に心理学用語（痛み、信念、願望など）は2つの意味、すなわち物的実体を指す唯物論的、機能主義的意味と、意識的実体を指す意識の意味とがある。この定義には、痛みについての意識的な面は何も表れてないが、我々の痛みには内的な意識的感覚が厳然としてある。一方でゾンビの痛みは、唯物論的で意識的感覚はないとしている。153

この2種類の現象は独立であるが、一貫性の原理によって現実世界では併発するので、それほど問題にするな、と彼は言うが、その一貫性は納得できない。（引用2）意識は説明のうえで物質と、とくに人間の行動とは無関係であることが明らかになった。彼の二元論的見解においては、意識は物理世界の一部ではなく、物理世界は因果的に閉じられているので、こうした結論は当然とも言える。だがそれでは、お腹がすいたから食べたなどの内的理由付けはことごとく誤りであることになる。人間の行動は物理的に説明されねばならないからだ。意識は存在しても、行動に対して何の役割も担わない。154

さらに悪いことには、（引用3）自分の意識についての判断でさえも、自分の意識を用いて説明することはまったくできない。たとえば、「私は痛みを感じている」と言っても、痛みを感じている事実とは、説明上無関係であるとする。なぜなら、発話は物理的事象であり、物理的原因によって説明されるものだからである。チャルマーズは意識の状態の還元不能

性を擁護する本を書いたが、この彼の行為は、彼の意識的狀態とは何の関係もないことになる。155

最悪の極めつけは、機能的状態が意識を「生じさせる」仕事を担っているのは、「情報」だと言う点だ。この情報は、「情報理論」などというときの意味を拡張したもので、物理世界において「差異をつくる差異」である。彼によると、地面に降り注ぐ雨は、地面に差異をもたらすから、「情報」をもっている。この情報から意識が発生するのならば、(引用4) 意識はいたるところにある、だ。サーモスタットは意識的であり、天の川も意識的であり、石ころでさえも例外ではない。どれも「情報」をもっている。155

このばかげた考えは汎心論と呼ばれ、「情報」という観点から意識を説明することから直接導かれる。彼は「サーモスタットに経験があるならば、どこにでも経験がある。因果作用があれば情報があり、情報があるところにはどこにでも経験がある。石や電子などにも経験があるだろう」と書いている。156

チャルマーズは、彼の理論のばかげた結末をそのまま鵜呑みにした。ブロックは機能主義に抗して、機能的組織体が心の十分条件であれば、中国人民全体が(ひとりの中国人が、ひとつの神経細胞のアナロジーになり)心をもつことになってしまうと批判したが、チャルマーズはなんと、その通り心をもつのだ、と言ってしまったのだ。157

ここまで、彼の本の浅はかさを検討してきた。彼はさらに、300頁を過ぎたところで注意書きを添えて、全宇宙はひとつの巨大なコンピュータであるかもしれないと述べている。全宇宙は「純粹情報」からなり、その情報は究極的には「(原)現象的」であるから、世界全体はひとつの意識からなるのだろう、それは「不思議な美しさだ」と言う。実は、彼がそこまで自己陶醉に陥っていることこそ、不思議なのである。157

第5節 浅はかさに直面して、チャルマーズは2つのレトリカルな反応をしている。第1に、灰色の塊である脳が意識をもつほうが信じ難い、脳にそれが可能ならば、サーモスタットにも可能であってもいいではないか、と言う。第2に、サーモスタットが意識をもたないとどうして言えるのか、人間にあってネズミにない意識の成分があるのだから、ネズミにあってサーモスタットにない意識の成分もあっていいのではないかと指摘する。158

これらの疑問の答えを簡単に述べよう。なぜチャルマーズがこの答えに思い至らないかの方が深遠な問題なのだが。第1の問題は、生物学的な事実であって、その信じ難さは無関係である。脳が意識を生み出しているという事実が厳然としてあるのだ。哲学的議論は別にして、私自身その事実を知っている。第2に、いまだ不完全な状態ではあるが、脳が意

識を生み出すほどの特殊な構造と機能をもつことを、我々は理解しつつある。意識を生み出すには、脳ほどの因果的力をもつ必要がある（それで十分とは言えないかもしれないが）のだ。脳の因果力に匹敵する人工物もあるにちがいない。159

これはエンジンの馬力を評価するような、明快な議論である。脳ほどの因果力をサーモスタットが持っているだろうか。サーモスタットが意識的であるなどと言うのは、生物学からすると、問題外である。159

さらに問題なことに、「サーモスタット」とは特定の物体を指す言葉ではない。温度変化に応答するメカニズムである。パイメタルでもいいし、温度計を見ながらスイッチを入り／切りする人間でもいいのだ。こんな単純なメカニズムが、意識を生じるに必要な因果力をもつはずがない。160

第6節 チャルマーズは、彼の結論は意識の還元不能性を厳格に扱った論理的帰結であると考えているようだが、どこで間違っただろうか。問題の由来は、還元不能理論である性質二元論を、心的機能を情報処理とみなす機能主義、すなわち心の計算論的説明と結びつけた点にある。誤りをただすためには、チャルマーズの結論を捨て去ったうえで、次のように意識を厳格に扱わねばならない。160

(1) 心理学用語に2つの定義などない。無意識の信念や願望も心的状態である。161

(2) 意識は行動の説明に寄与する。無意識では本も書けない。161

(3) 意識の表象が何に関するかが重要である。161

(4) 汎心論を支持する理由はまったくない。意識は完全に生物学的現象である。161

第7節 問題解決に貢献せずとも、その時代の混乱を映し出すことで意義ある本はある。チャルマーズの本は、心の哲学の分野のひとつのステップとなった。ツーソンの意識会議で多くの参加者に議論されたし、『タイム』にも取りあげられたし、なにより、彼の本のカバーには多くの哲学者の賛辞が寄せられた。ただ、正確なところ、その本は混乱の塊である。その混乱は知の歴史の光のもとでのみ現れる。こと心に関しては、「二元論」「唯物論」など、時代遅れの用語しかないのが問題だ。現代科学を受け入れると、ある種の唯物論を強制されるが、伝統的な唯物論は明らかに誤りだ。すると、機能主義や計算主義に期待を寄せるが、それらの意識の説明も誤りなのである。次には、意識のことを考えないか、その存在自体を否定するのである。それも今では難しい。チャルマーズは機能主義に性質二

元論を付け加えたが、2つの誤った教義をひとつのばかげた教義に集約しただけだ。163

正しくは、認知科学の分野で手探りしているように、これまでの旧式の用語にとらわれず、脳は生物学的器官であり、意識は生物学的プロセスであると考えていくことである。163

付録1 チャルマーズの書簡

『意識をもつ心』の中では、サールが発見した「明らかな」とか、「ばかげた」とかとされる数々の点を、そうではないと私は反論した。心身問題の教訓のひとつは、意識が明らかなものではなく、ある人にとっての明らかな真実が、他の人にとってはばかげたものになるということである。そこで、論点を再度吟味して、サールが何か本質的なことを言っているのか見てみよう。163

私の主張の第1点は、長らく主張してきたように、意識は非物理的特性であることだ。世界の物理的構造は意識がなくとも論理的に一貫している。だから、意識の存在は世界を超えた事実である。サールは、(意識ならぬ)「空飛ぶ豚」は、それを加えても物理世界は依然として一貫しているので、(意識も空飛ぶ豚も)非物理的であることにはならないと、私の主張を否定する。164

ここで、サールは2つの根本的誤りを犯している。第1に、それを取り除いても世界が一貫しているものが非物理的なものであって、付け加えてみても始まらない。第2に、空飛ぶ豚には空を飛ぶ仕組みがあるので、我々と同様な物理的な構造をもつだろう。だから、空を飛ぶことを取り除いた物理世界は、自己矛盾となる。一方で、意識を取り除いた物理世界は、サールも認めているように矛盾がない。164

基本的な論点は、豚の位置は物理世界の中に論理的に見出せるが、意識はそうではないという点だ。そのため、意識を説明するためには、脳だけでは不十分である。このギャップを埋めるためには、独立な「橋渡し法則」が必要だ。それを嫌う人々は意識を矮小化するが、それはそれで問題をはらむ。どちらにしろ、サールのように、意識の還元不能性を主張する者には、この矮小化の選択肢はない。165

次なる問題は、私の非還元的機能主義である。橋渡し法則が要求するのは、同一の機能的組織体は、同種の意識をもつ特徴である。この議論の詳細は、サールが言うようなつまらない議論には要約できない。詳細は、私の本の7章にあるが、サールは無視している。その特徴がなければ、本人が気づかない間に意識的経験が大きく変化してしまうのである。

サールは脳疾患患者がその例外に当たるといふが、私の議論は機能的に同一の存在に当てはまるのであって、我々より劣る機能存在が無意識であってもおかしくない。165

最後の問題は汎心論である。汎心論は、サールが言うような、性質二元論と機能主義から帰結されるものではない。私はひとつの可能性として述べているだけであり、汎心論自体は不可知である。(世界がひとつの意識からなるという)「不思議なまでに美しい」理論は、私自身、容易には受け入れられない理論である。166

私の主張は、汎心論が一般に言われるほど不合理ではなく、それを完全に否定することも難しいというものだ。サールは、意識をもつには適切な「因果力」が必要であり、サーモスタットのようなシステムには、そこまでの「構造」がないと云うが、それこそが問題となる論点である。彼は、自分主張の論拠を示していない(意識にどんな構造が必要であるかわかれば心身問題はほとんど解けているのだが)。つまり、汎心論は直観に反するが、頭から否定はできないのだ。166

本質的な議論において、サールはいつも直感的に「ばかげた」と反応する。神経細胞群が意識を生み出すならば、シリコンチップや中国人民もそれができる、と考えるのはばかげたことだろうか。脳をもとに行動を説明するところに意識はないと私は主張した(意識は因果的に無関係だとは主張してない)が、彼自身、意識の還元不能性を主張しているのだから、よく考えれば私の主張に同意するはずだ。167

深く検討すると私たちの差異はそれほど大きくはない。サールはマントラのように何度も「脳が意識の原因だ」と述べているが、私も同感だ。だが私は、結果から原因を分離したいのだ。脳だけが意識を生じるわけではないだろう。サールの主張は問題の表明であって、解の表明ではない。その問題を受け入れたら次に、なぜ意識が脳から生じるのか、どの特性のおかげか、その因果法則は何か、と考える必要があるのだ。真の解答は橋渡しの理論を要求する。私の本はそうした試みの始まりなのだ。意識についての我々の理論がまだ原始的なレベルにあることは言うまでもない。167

このあとの議論は次のホームページを見よ。<http://ling.ucsc.edu/~chalmers/nyrb/>

付録2 サールの返信(繰り返しの部分は略)

チャルマーズは、性質二元論と機能主義を結びつけたことで、信じ難い結論に至った。168

私が提示した問題点4点は、先に述べたものであった。(略) 168

これらの点にチャルマーズは反論していない。議論もなしで、「直感的な反応」だとして片付けている。そこでもう一度、その4点を明確にしよう。(略) 170

我々が意識があると知っているのは、人間と動物の脳のみである。意識は神経生理学的プロセスによって発生するとも知っている。脳疾患で無意識になることも、ときに意識が回復することも知っている。意識は因果的プロセスなのである。石や電子に心があるなどとは、SFである。SFは科学ではないし、哲学でもない。170

チャルマーズが汎心論を「不可知」とであると言うのには驚いた。本の中で彼は、「意識は機能的組織体から生まれ」、それを担うのは「情報」だとして、この情報が「現実世界が物理的様相と現象的様相との双方をもつ基本原理となっている」と言うのだ。さらに、「この考えを支える間接的方法がある」とも言っている。そして、情報がどこにでもあるから意識もどこにでもあるという主張展開には、汎心論が前提されているのだ。171

汎心論を支持しないのなら、サーモスタットの章はいったいなんのためだろう(その章の引用部分略)。彼は、サーモスタットの意識が我々にわからないことを、動物の意識がわからないことと同様に扱い、「サーモスタットは脳と同じだ」と言っているのに。172

神経生理学にまじめに取り組む者は、こんなことは言えないだろう。彼は、サーモスタットの意識は「不可知」などという態度はとらずに、サーモスタットが意識をもつものだから、すべてが意識をもつと主張している。173

チャルマーズは懸命にも、世界がひとつの意識からなることは不可知としたが、本の中ではそうは述べてない。173

チャルマーズの本は、もともと誤った前提、「性質二元論」と「非還元的機能主義」から、十分検討せずに出発しているのだ。173

性質二元論について考える。彼は、意識を除いた物理世界を想像できるという(これは正しい)が、取り除くと物が意識を生成するという物理法則を変更した物理世界になってしまう。私の空飛ぶ豚とは、そこまで物理法則が変更されるだろうという例示である。彼は、意識を取り除いても物理法則は変わらないと言うが、それは性質二元論の帰結であり、性質二元論を証明したことにはならない。自然界の事実からすれば、豚は空を飛ばないし、脳から意識が生まれるのだ。両者の唯一の違いは、意識は還元不能であることだ。還元不

能性は性質二元論の証明ではない。174

次に非還元的機能主義について考える。彼は、同じ機能的組織体は同種の意識をもつと言う。その論理をまとめると、このマッチングがないと本人が気づかないうちに意識経験が大きく変わってしまう、である。この説明では、「気づく」などの言葉が、意識的と無意識的の二重の意味に使われて、議論があいまいになっている。論点は、内的経験と外的行動が機能的組織体によってどのように完全にマッチするかである。彼は、その点には何も触れていない。彼の論点先取した議論は以下のとおり。(略) 175

チャルマーズは、私がたびたび述べる「脳が意識の原因となる」という事実には憤っているが、これは哲学的説明でも尊重されるべき、自然界の事実である。もちろん原理的には、非生物学的素材から、意識をもつ機械もできるだろう。しかし、その試みの初段階は、現実生活で脳がどのような生物学的プロセスで働いているかの究明である。その答えは、最初は「シナプス」、「40Hz」、「神経地図」などの用語によって与えられるのだ。その後、抽象的な概念に展開するのだろう。176

チャルマーズの用語は因果的な説明力がないので、意識研究の出発点にはならない。それなりの刺激の受け手を連れてくれば、どんな刺激でも「情報」になる。木の音から樹齢を知る人さえもいる。情報の受け手を捨象すれば、すべてが空虚な情報となる。彼の本は、どのように脳が意識を生み出すかに、何も貢献しないだろう。176

以上